

白ゆりが届く

市川茂子

五月の半ばに、隣の新聞販売店の前で、長方形の鉢を二つ並べて、ゆりの苗を植えていた。ほかに丈の低いひまわりと小花の鉢が三つほど、見栄えよく配置しようと、配達員のお兄さんが世話をしている。

軒下に長椅子を置いて、通りすがりの人も一休み出来るようにしている。お花の係りですかと、お兄さんに聞いたたら、「はい」と返事があった。

通るたびに眺めながら、どんな色のゆりの花が咲くかと気にしてみている。しばらくすると、朱色のつぼみが開きはじめてから、次つぎと赤くくすんだ色や小豆色のような、あまり見かけない珍しい色の花が咲いた。

去年白ゆりの花を持って来てくれた近所のお姉さんが、今年も届けてくれるとの約束だったの
で、白ゆりの花も、そろそろ咲く頃だろうと思っていた。

隣に咲いているゆりの花を見ていると、去年の約束を忘れてしまったかと、やきもきしながら、

それにしても物欲しそうに催促するのもいやで言いそびれていた。お姉さんは用事があって何度も来ていたが、花を持ってくるそぶりがないので、半分は諦めながらもまだ心待ちにしていた。

まえばれもなく六月一日の朝、いま切ったばかりなので手入れをして飾ってくださいと言って届けてくれた。忘れてはいなかった。信頼して待っていたらよかったのに、ゆれ動いた心を反省した。

ブルーの縞模様の入ったガラスの大きな花びんを出して、入口から見える正面に飾った。開きはじめて花の花粉を取るのに、片手にちり紙を持って指先でつまんだら、飛び散ることなくすると抜き取ることが出来た。太い茎についている花をかぞえたら、十二個ついている。ほかの茎にも五個や三個とつぼみなど、全部で三十二個あった。

白ゆりが花びんにあふればかりに周りに広がっているのを一人で眺めるだけではもったいない
と思つて、隣のお姉さんと呼んで見てもらった。お茶もおダンゴも出ませんが、ほめられてお花が喜んでいると、言いわけをする。

翌日には、ときどきに花束や鉢植えの花を届けてくれる奥さんが来て、みごとに咲いていると
言つて、ケイタイで写真を撮つていった。それから用事のある人が、花に呼ばれたかのようにつづいて来る。盛りのおきと思つて、新聞配達員のお兄さんにも見てもらった。

庭に咲いた春の花も終り、まわりに雑草が生えてきたので、梅雨入り前に新しい花を植えようと

思っても、雑用に追われて出来なかった。目の前に何かしらの花がないと、さびしい気分になる。来年も、庭に咲かせている白ゆりの花を持って来てくれるという約束はなかったが、必ず届けてくれることをひそかに思っ、楽しみにしている。

「清紫会」だより

- ◆第155回 平成二十九年五月十八日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉大石久美・美容院／小野澤繁雄・駅名／林博子・私の部屋（ある終焉）／松井淑子・お祭り
- ◆第156回 六月十五日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉市川茂子・白ゆりが届く
- ◆第157回 平成年七月二十日（木）、会場・文京シビックセンター三階B会議室
〈提出作品〉林博子・孟蘭盆会近し／松井淑子・ある住宅街の話／丸山弘子・雀